

本科 1 期 5 月度

解答

Z会東大進学教室

東大日本史



4章 中世の文化

問題

解説

【着眼点】

各宗派の展開過程については基本的事項に属すが、その広まりを社会的状況の中で位置付けていくことが重要である。室町時代に広く受容されていった禪宗・浄土真宗・日蓮宗について述べるとよい。

【知識の整理】

● 禪宗の動向

鎌倉時代に南宋の官寺の制度に倣って五山が制定されたが、室町時代になると再編成され、五山・十刹・諸山の制度が確立した。こうした官寺では、国家安泰や天皇家・將軍家を始めとする檀越のための祈禱や供養などが行われた。五山は鎌倉・京都の寺院に限定されていたのに対し、十刹は全国各地に設定された。十刹は設定当初は10の寺院であったが、次第に増加して準十刹なども設けられ、中世末には60数カ寺となり、諸山は230カ寺に達した。五山寺院では漢詩文を初めとする五山文学の世界が花開いた。それは仏教の枠を越えて儒教など漢籍に及び、五山版の出版など、多方面にわたって文化活動が展開しされた。

五山派には臨済宗のほとんどの門派や曹洞宗宏智派が属し、叢林と称されたのに対して、臨済宗の大徳寺派・妙心寺派や地方に展開した永平道元系曹洞宗などは林下と呼ばれ、戦国期以降に戦国大名や在地の武士勢力や民衆などに受容されて地方に展開していった。

禪宗が室町文化に及ぼした影響は非常に大きい。もとは禪の説話を題材として描かれていた水墨画は、やがて雪舟により山水の大自然を写す山水画として日本の画境が開かれた。また、寺院において禪を修行する静寂な環境を表そうとする作庭は、大自然を象徴する枯淡な枯山水の庭を創出した。こうした文化はそもそも禪の修行の場を整えることから始まった。また、禪宗寺院の中で営まれていた儀礼が、同朋衆と呼ばれる技能や芸能をもって將軍に仕えた人々により一般に広まることも注目され、立花や喫茶の風流などはその代表的なものである。多彩な内容を持つ五山の文化的な営みは、15世紀半ばを過ぎると勢いを失ったが、超俗的で象徴性に富んだその特性は、禪宗の枠を越えた広い文化領域に影響を及ぼし、1つの新しい文化的要素を加えた。

また、足利尊氏・直義兄弟は、夢窓疎石の進めにより安国寺と利生塔を設立した。これは、鎌倉幕府崩壊期の元弘以来の戦没者の靈を弔い、戦乱を防止し、天下泰平を祈るためにあった。利生塔の多くは、天台宗・真言宗・律宗などの既成仏教系の大寺院や五山派の禪宗寺院の境内に設けられた。安国寺は五山派の寺院が指定されて安国寺と改称したものである。室町幕府は、国ごとに安国寺と利生塔を設けることにより、幕府の威信を高める一方、守護がそれぞれの領国内の治安維持と統制ができるように意図した。

●一向宗と日蓮宗

鎌倉新仏教は鎌倉時代から教団として成立していたわけではない。成立当初は様々な弾圧があり、鎌倉時代においては圧倒的に旧仏教が優勢であった。広大な寺領を擁する比叡山や南都の諸大寺は、権門としての伝統と実力を維持していたため、新仏教は都市の商工業者や農村の領主・農民を対象に、日常レベルでの布教活動を展開していった。

南北朝の内乱は人やモノの流通を活発にし、中央と地方の文化交流が多元的に発展した。この潮流は仏教教団の動向にも大きな影響をもたらし、広い地域にわたる信仰圏が生まれ、僧侶の活動範囲が拡大するなど、庶民の支持を受けた仏教信仰が成長した。

室町時代の農村では、農耕を生活の場とする家集団が成長して惣を形成するようになり、武士や商工業者など村落を越えて活動する人々を包み込んで、村落社会は格段の豊かさと広がりを見せるようになった。惣では有力住民を中心に構成員全体で運営され、ここでの決定は「衆儀」と呼ばれ、全員参加の原則の下に村鎮守や村堂などに鎮座する神仏に誓約するかたちで行われた。

親鸞の血脉を引いて本願寺法主となった蓮如は、比叡山の執拗な攻撃を避けて北陸地方の農村に新たな教団の基盤を求めて展開した。本願寺教団は15世紀半ばにこの第8代法主蓮如の時代から非常に発展したのである。蓮如は惣の指導者を教団組織者として把握することにより惣住民への教線を拡大していった。伝統的な宗教状況と対応しながら独特の布教活動を展開した蓮如の運動は、やがて加賀国守護の富樫氏と対立する一向一揆を引き起こすこととなったが、のちに京都山科に豪壮な本願寺を構えて一向宗の拠点とし、「寺中広大無辺、ただ仏國のごとし」と評された。

東国に生まれた日蓮を始祖とする日蓮宗（法華宗）は、日像を初めとする門弟たちによって京都への進出を果たし、南北朝期には妙顕寺・本国寺を初めとする教団の拠点を市中に確立するに至った。これらの寺院は天皇の勅願所や幕府の祈願所に定められ、その保護を得て町の中に巨大な伽藍を築いたが、新興の商工業者を信者として迎え入れたことはとくに注目される。洛中の商工業者として成長する柳酒屋^{やなぎのさか や}の支持を得た妙顕寺は、上京を舞台に勢力を伸長させ、法華宗を代表する寺院としての立場を確立した。京都の市中にこのような大規模な寺院の伽藍が建立されたのは、平安京が開かれて以来のことであったため、その可否をめぐっては様々な議論を呼んだ。下京には本国寺が建立され、壮大な伽藍を誇り、都市に住む民衆の信仰を広く集めた。

15世紀の半ば頃には、「法華宗二十一カ本山」と称される日蓮宗の本山が下京を中心につくられ、京都市民の信仰と財力によって、日蓮宗の繁栄を迎えた。とくに応仁の乱後は、日親らの活躍もあって宗勢は一挙に伸長し、「町の宗教」としての地位を獲得した。日親は積極的に議論を仕掛けて改宗させるという方策をとったことにより幕府から弾圧を受け、真っ赤に焼けた鍋をかぶせられたことから「鍋冠^{なべかぶ}り上人」と呼ばれた。

16世紀になると、京都の町衆は自治組織を形成して町政を司る一方、町の防衛のために周辺の戦国大名と連携して自らも武力を持った。法華信仰のもとに団結した町衆は、法華一揆を起こして山科本願寺を攻撃し壊滅させたが、次いで比叡山の勢力と戦った天文法華の乱に破れ、京都の町は焦土と化した。その後の復興に際しては、上下京の自治組織は武装を完全に廃棄したので、法華一揆は再び起こることはなかった。

中世佛教の終焉は、16世紀後半の30年間にわたり、織田信長と豊臣秀吉が打ち出した徹底的な佛教政策によってもたらされた。比叡山の焼打ちや一向一揆の壊滅、法華宗や高野山に対する弾圧など、織豊政権の政策遂行の過程で起きた様々な事件は中世佛教の秩序を崩壊させた。そして豊臣秀吉が打ち出した一連の佛教政策により、教団は統一政権に服従するという条件の下、佛教を中心とする宗教全体に対する支配が貫徹され、それは江戸幕府に継承されていった。

【解答のポイント】

五山派：將軍や大名など上層武士層に浸透。五山版・水墨画などの文化を生み出す

林下：地方武士・民衆に浸透

浄土真宗：蓮如らが畿内・北陸・東海地方の惣に布教

日蓮宗：日親らが京都の商工業者に布教

⇒一向一揆・法華一揆など自治組織形成

解答例

室町幕府や守護大名の庇護を受けた禪宗の五山派は將軍や大名などの上層武士層に浸透し、五山版や水墨画、茶の湯などの文化を生み出した。また林下は地方武士・民衆の支持を得て各地に広まった。浄土真宗では蓮如らが出て畿内・北陸・東海地方の惣村に浸透することにより布教を進め、日蓮宗は日親らにより京都の商工業者を中心に広まった。戦国期にはその信仰を核に一向一揆・法華一揆が形成され、自動的組織の紐帶として機能した。

(200字)

添削課題

解説

【着眼点】

(1)～(4)がそれぞれ何を提示しているのかまとめた上で、「当時の民衆の状況」と関係させながら述べていく。室町文化の特徴を述べさせる基本的問題といえよう。

【知識の整理】

●自治組織の形成

14世紀から16世紀にかけては、新たな社会結合としての自治組織が形成され、共同の理念が創出された時代であった。農村には村落共同体としての惣が生まれ、都市では商工業者の同業組織である座や、町人の地縁的結合である町・都市などが広範に形成されていった。これは社会構成上の結合に留まらず、合戦から芸能に至るまで、集団による共同作業が盛んに行われた。茶寄合・連歌会の流行もこの流れの中で捉えることができる。中世社会を特徴付ける結座性・寄合性は、この時期の諸芸能の性格をも大きく規定しているのである。

着実に力を蓄えてきた中世の農民や商・手工業者は、古代的束縛から自由であるべく団結と連帯を必要とし、新しい生活組織を作り上げていった。さらには、商・手工業者の座はもちろんのこと、芸能者も座を結んで活動した。農村における「講」や「惣の寄合」に限らず、「会所」と呼ばれた集会の施設に至るまで、中世の生活組織の持つ寄合性は、その中で育まれた諸文化に著しい影響を及ぼした。また、中世後期は「一揆の時代」とも呼ばれるように、様々な集団形成のもとなる人と人との結びつきが生まれ、成員間に強い連帯意識が保たれていた。「一揆」とは酒屋・土倉を襲う行為をいうのではなく、揆を一にする、つまり集団の意識を1つにまとめるることであることに注意したい。

●文化の地方伝播

京都はきわめて政治色の強い都市であったが、南北朝の内乱以来、応仁の乱にかけて相次ぐ戦乱の中で、次第に商業都市へと変貌し、町衆たちが活発な動きを見せた。彼らは衰退していく公家に、古典の書写や祭りの歌曲を依頼し、公家はそれによって報酬を得るといった交流が生まれ、そこに芸能や衣食の生活文化が花開いた。

茶・花・香といった室内芸能も、僧院や公家社会という殻を破って、さらに広い世界に広がった。食生活においても、「七十一番職人歌合」にそうめん売りや饅頭売りが登場するように、豊かさと広がりを見せてくる。

その上、室町時代には商品流通や政治的諸関係を通じて、地方の人々にも京都は身近なものになった。国人や守護たちの京都への憧れは一層強く、中央の公家文化を積極的に移入しようとした。旅を愛する連歌師や画僧らが、初めその媒介の役割を果たした。応仁の乱後には、生活に困った公家や文化人自身が新興大名を頼って次々と下り、京都の文化は地方に拡散した。

(3)の文章は九条政基くじょうまさきもとが和泉国日根野荘に滞在した時の記録『政基公旅引付』に見られる記事であるが、その中で政基は、荘民の間にすでに年中行事が確立し、祭礼や雨乞いなどの民俗行事には必ず風流や能が伴い、その水準は都に比肩し、また灌漑施設に伴う技術など、村民文化

は高い水準にあったことに驚いている。これらのことから、農村にも京都から文化が伝わって高いレベルにあったことがわかる。

●室町時代の芸能

室町時代を代表するいくつかの文芸・芸能は、寄合性を抜きにしては語ることができない。連歌はもちろん、茶道・立花・聞香など、今日いわゆる室内芸能と名付けられるすべては、寄合の場にその本質を負っている。猿楽能や狂言もまた例外ではない。世阿弥が「衆人愛敬をもて一座建立の寿福とせり」(『風姿花伝』)という「一座」とは、まさしく演者とそこに寄り集う人々が1つの空間を共有していることであって、演技者の内的世界が観客の想像力と共に鳴する世界をこそ、「建立」すべき「一座」と考えていたのであった。

二条良基が連歌について、「諸人面白がらねば、いかなる正道も曲もなし。たとへば田楽・猿楽のごとし」と述べているように、これらの芸能は社会的身分の上下関係を越えて、人々が同じ場所で同時に同じ感覚を分かち合う当座の文芸もしくは芸能であったのである。室町時代は、こうした文芸を介して貴族文学の伝統が庶民によって享受されるようになり、庶民の創造的精神の活力に支えられて、王朝古典の世界が新しい文芸として再生したのである。

連歌はもとは、和歌を上句・下句に分けて、問答の形で2人で詠み出すところに起源があり、和歌の1つの変態として古くから行われていたのである。それが平安時代の末頃に、5・7・5の長句と7・7の短句を交互に10句・20句と連ねて、鎖連歌と呼ぶようになり、鎌倉時代に入ると百韻連歌が行われるようになった。そして句を連ねるまでの約束事もつくられた。二条良基の著した連歌論書『筑波問答』の記述によると、13世紀中頃から京都の毘沙門堂・法勝寺・清水寺地主權現の花の下で、地下（庶民）の好士によって連歌会が行われ、ハレの場として人々の閑心を集めめた。京を中心とした連歌の流行は、南北朝期になると一段と高まり、「二条河原落書」に、「京・鎌倉ヲコキマゼテ、一座ソロハヌエセ連歌、在々所々ノ歌連歌、点者ニナラヌ人ヅナキ」と書かれたほどであった。

連歌会とともに、茶寄合もまた流行した。鎌倉時代初めに栄西によって宋からもたらされた喫茶の風習は、当初は薬用として供されていたものが、寺院から武家へ、やがて民間に至るまで普及していく。連歌会と茶寄合は、それ自身が独立完結した形で享受されるというよりは、しばしば連歌会の後に茶会、および酒宴・乱舞を伴うといったような、遊宴の気分の濃いものであった。こういった一連の寄合の場として、専用の部屋・建物が必要とされ、会所と呼ばれる専用の施設がつくられた。

また、中世村落の宮座の神事を基盤として展開してきた鎌倉時代の猿楽は、鎌倉中期頃には、劇形態の能を演ずるようになっていたと想像されている。14世紀中頃になると、大和を初め近江・丹波・摂津・伊勢など、各地で猿楽座が台頭してきた。1374（文中3・応安7）年の今熊野での觀阿弥・世阿弥父子による演能が行われた際、將軍足利義満が来臨し、演技に魅了された義満は、以降觀阿弥・世阿弥父子に対して厚い保護を加えた。この時、猿楽能は大きな変貌を遂げ、やがて田楽を圧倒して、中世を代表する芸能となった。

【解答のポイント】

農業生産力の向上 →自治的村落共同体である惣の形成

商工業の発展 →自治都市の形成



農民や町衆などの民衆が成長 ⇒集団で芸能を享受：猿楽・喫茶・盆踊り・連歌など

上流階級と民衆との文化の相互への影響



身分を越えた芸能の共有

【解答例】

室町時代には、農業生産力の向上や商工業の発展を背景に、惣や都市の形成が進んだ。その中で農民や町衆などの民衆が成長し、自治的結合を強めると、文化の担い手として、猿楽・喫茶・連歌などの芸能を集団で楽しむようになった。また、上流階級もこれらの文化を吸収する一方、民衆も上流階級の文化を受容して自らの文化を洗練させ、身分を越えた文化が共有されるようになった。

(175字)